

日本哲学会大会シンポジウム「知識・価値・社会 --- 認識論を問い直す」 伊勢田論文の要約と金森・松葉両論文へのコメント

2013年5月11日
伊勢田哲治（京都大学）

注：例年本シンポジウムは参加者がすでに論文を読んでいるという前提で行われている。しかし、私自身の聴衆としての経験から言うと、読まずに参加してしまうことが多い。そのため要約を配布することで若干の便宜をはかることとする。

1 伊勢田「認識論の社会化と非認識的価値」要約

- ・ 探究活動の社会化
- ・ 探究活動に対して非認識論的な評価がくだされる場面

英米系の認識論（ここでは特に分析系社会認識論と呼ばれるものをあつかう）はこうした状況に対して何ができるのか

1-1 使用する概念

探究活動(inquiring activity)： 科学の知識生産活動としての側面を含みつつ、より広い意味での知識生産活動も想定

探求活動の社会化： 探究活動の集団化、外部社会との相互関係強化などを総称して「探求活動の社会化」と呼ぶ

非認識的価値(non-epistemic value)： ロンジーノの言う文脈的価値や個人的価値など

1-2 分析系社会認識論における探求活動の社会化

- (1) 真理主義：科学のさまざまな制度を真理の生産と関わるさまざまな指標で評価
- (2) 社会反証主義：非認識的価値に動かされる科学者の集団が相互批判の仕組みを持つことである種の客観性を達成できるという考え方
 - ・ 伊勢田自身の研究対象である社会ベイズ主義もこのリストに含めることができるが紙幅の都合で今回の論文からは外している。含めても議論の本筋はあまり代わらない。
 - ・ 非認識的価値は評価される側として十分取り入れられているが、評価する側の価値については分析系社会認識論は保守的

1-3 非認識的価値による評価

分析系認識論の評価基準の保守性への批判

(1) スティッチの認識論的プラグマティズム：価値の多元性をベースとした道具的合理性

・スティッチは合理性や真理の価値そのものを否定するが、それは行き過ぎに思える。多元的価値の一つとして残すことはできるはず（改訂版認識論的プラグマティズム）

(2) フラーの分析系社会認識論批判：分析系社会認識論は科学の全体像をとらえそこなっている、分析系社会認識論の科学の評価は現状維持的で権力の不均衡の大きい制度を選んでしまう、等

・フルーの批判にはもっともな点もあるが、科学の全体に対する多元的評価のうちの一つを認識論的分析が担う、というように位置づけるなら回避可能な問題。

1-4 分析系社会認識論の位置づけの再考

全体的評価との関わりを意識しながらも粛々と認識論的分析を続けるのが分析系社会認識論者の役目ではないか。

2 金森「認識論とその外部」の感想メモ

・認識論が科学を「理念的鏡」としてきた、という比喩の意味。内容なのか、探求のスタイルなのか

・そもそも金森氏の考える「認識論」に英米系の認識論は含まれているのか？

・科学の理想化をやめたとき、認識論史のやり方に2つの選択肢が残される、という主張だと理解したが、第二の行き方を認識論そのものにあてはめたときどうなるのか？本当に「科学批判」になるのか？

・英米の認識論（自然化された認識論、科学方法論、社会認識論なども含めて）では科学は理想化されているというよりは、一番信頼できる知識生産の方法だとみなされている、くらいだと思う。金森氏のいう「理念的な科学観」を受け入れるのとはだいぶ違うと思うのだが？

・科学が理想的でないさまざまな面を持つにせよ、認識論はその認識的側面をきちんと分析することで全体像の理解に貢献すればいいのではないかと思うがどうか？

・金森氏の福島の実況についての記述のいくつか（政府が「旧ソ連よりも酷い棄民ぶり」で「多くの重要データを可能な限り長く隠蔽し続けた」とか、科学者が「自分たちをも含めた支配階級の利益関心を欺瞞的に代弁するという様子を露わに示す」（すべて27ページ）、あるいは「近未来に放射線障害で苦しむはずの多くの同胞」（38ページ）という表現など）は、あまりにわたしの現状認識とかけ離れていて、正直ショックをうけた（もちろん同意できる記述もある）。¹ 保守性バイアスや保身のた

¹ たとえばわたしの現状認識の基礎になっているのは田崎晴明『やっかいな放射線と向き合って暮らしていくための基礎知識』（朝日出版社）などで、これなどは原子力産業と利害関係の薄い科学者による良心的

めの情報操作はあるにせよ、結局放射線の被害について一番よく知っているのは放射線医学の専門家であり、彼らの提供する情報が判断のベースになるとわたしは考える。

・具体的な被害の程度などについてこの場で論じるのは生産的ではないと思うが、この事故を受けて、科学者という存在や彼らの生み出す知識を哲学者がどう扱うべきかというのは、今回のシンポジウムのテーマの範囲内におさまる話題だと思う。

3 松葉「一般的等価性」から「非等価性」のデモクラシーへの感想メモ

・全体としては、「一般的等価性」を前提とした科学技術や社会制度が「フクシマ」において破局に至り、現在「非等価性」のパラダイムへの転換が求められている、という状況認識の下、そのパラダイム転換のために科学技術と社会がそれぞれ何をしなくてはならないかを提案している、という理解でよいだろうか？

・価値あるものを比較すること自体と、特定のやり方で比較することの区別があいまいにされているのではないか。これまでのリスク論批判で行われてきたのは貨幣価値などを使った特定の比較の仕方に対する批判だが、ナンシーの「非等価性」はさまざまな価値を比較すること自体を拒絶しようとしているように見える。これは意思決定そのものの拒絶につながるのか。

・人間の研究において時間性・社会性・実践性・身体性などが大事だというのはそのとおりだが、自然科学モデルの研究も並行してやればよいのではないか。

・「科学技術は、あらゆる存在を分析的に切り取り、「一般的等価物」に還元することによって、そこから時間性と社会性、実践性と身体性を失わせる」(44 ページ)というのがよく分からない。なんらかの尺度にあてはめるといふ行為そのものが一般的等価物への還元だと考えるのか？本当に自然科学モデルの研究は尺度へのあてはめを不可避に伴うのか、伴ったとしてそれが価値の序列と本当に関係するのか(長さを測ったら自動的に長いものほど価値があるという価値観にコミットするのか)、科学研究で使われる尺度は多様すぎてぜんぜん「一般的」ではないのではないか(「反応速度」という尺度を使った研究が他のものにどう一般化できるのか)。

・コンセンサス会議についての分析や指摘は同意できる点が多いが、これもやはり「比較不可能性」を実現する仕組みというよりは、正しい比較を実現するための仕組みではないのだろうか。また、コンセンサス会議に時間性・社会性等々をとりもどす機能を期待するのはさすがに無理ではないか。

な啓蒙書だと思うのだが、金森氏にはこういう本はどう映るのだろうか？放射線による被害は非常に小さく抑えられているという結論が出ている時点で「支配階級の利益関心を欺瞞的に代弁」していることになるのだろうか。田崎氏の本はオンラインで全文読めるので、現状について金森氏に近い印象をお持ちの方は(もちろんそうでない方も)ぜひちょっと見てみていただくと幸いです。